

自己形成のプロセス——弟の死を通して——

担当教員 立木 茂雄  
学籍番号 12032080 番 岡田 知英里

## 自己形成のプロセス——弟の死を通して——

学籍番号 12032080 番 岡田 知瑛里

- 1 研究の背景 (2頁)
- 2 方法 (3頁)
  - 2.1 調査概要
    - (1) 調査対象者
    - (2) インタビュー形式
- 3 ライフヒストリー (4頁)
  - 3.1 弟の死後——1年から2年——
    - (1) 弟が死んだ朝の出来事
    - (2) 病院からの電話
    - (3) 通夜
    - (4) 火葬
    - (5) 葬式
    - (6) 日常生活に戻って——筆者以外の家族の場合——
    - (7) 日常生活に戻って——筆者の場合——
    - (8) クラスメイトのMの存在
    - (9) クラスメイトのMのお母さんの存在
    - (10) 家庭教師の先生の存在
  - 3.2 弟の死後——3年から6年——
    - (1) 高校1年の時
    - (2) 高校2年・3年の時
  - 3.3 弟の死後——6年から10年——
    - (1) 大学生1年
    - (2) 大学2年生・3年生
- 4 考察 (16頁)
  - 4.1 悲観のプロセスから見た考察
    - (1) 精神的打撃と麻痺状態
    - (2) 否認

- (3) パニック
  - (4) 怒りと不当感・敵意とルサンチマン（うらみ）
  - (5) 罪意識
  - (6) 空想形式、幻想
  - (7) 孤独感と抑うつ・精神的混乱とアパシー
  - (8) あきらめ（受容）・新しい希望
  - (9) 立ち直りの段階—新しいアイデンティティの誕生
- 4.2 役割意識が及ぼす影響

- (1) 役割意識
  - (2) 母親の存在
- 5 まとめ（22頁）
- 6 さいごに（23頁）

## 1 研究の背景

私には2歳離れた弟がおり、私は弟と2人姉弟であった。だが、1996年の7月（当時の私は中学1年生であった）に弟は亡くなった。死亡原因は小脳の内出血というもので、夜中の寝ている間に小脳で内出血を起こしたために突然亡くなってしまったのだ。

この弟の突然死は当時の私に非常に大きな衝撃を与えることになった。なぜならば、今まで私自身、「人の死」というものをそれまで経験したことのなかったからである。「死」というものは当時の私にとっては非常に受け入れ難いものであった。だが、残された人間はいやがうえにも「死」というものを受け入れなければならない状況に陥ることになる。なぜならば生き残った自分自身の「生きる意味」を考え、「生きることは何か、死ぬことは何か」ということを一度、自分の頭で整理しなければ「死」というものを消化できず、前に進めない状況に陥ることになるからである。それゆえに、私自身にとって「弟の死」というものは自分の人生の中において大きな存在であると私は思っていた。

そして私にとって「弟の死」の存在が大きいということに改めて気がつくことになったきっかけは去年の就職活動であった。私は就職活動をする中で、自分の今までの人生を振り返る機会を得ることになった。そこで私が気づいたことは、私という人間は「弟の死」というものを中心において自己というものを語り、また「弟の死」を軸として過去を組み

立てて語っていたということである。私という人間にとって「弟の死」というものの存在は大きく、自分という人間のことを語る上でも、これまでの自分の過去を語る上でもなくてはならない存在であることは確かである。だがしかし、そもそも自分という人間は「弟の死」だけではなく、様々な出来事の影響を受けてこれまで形成されてきたはずである。それなのになぜ、私は自分の歩んできた過去や自己を語る上での軸として「弟の死」を選んでいたのであるか。それはただ単に「弟の死」の影響の方が他の出来事が私に与えた影響よりも強いということの意味するだけなのであるか、また私がまだ「弟の死」を受け入れられていないことで「弟の死」の視点からしか物事を見られないからなのであるか。

そこで自らの記憶を取捨選択する軸というのはどのようにして決定されるのだろうか。私は考えるようになったのである。私は自分自身で自己というものや自らの過去を語る上で、なぜ「弟の死」というものを数ある自分に起きた出来事の中から選び出し、それを軸として語るのか、つまり自己を物語る中心の軸を決定する要因は一体何なのだろうと考えるようになったのである。

そこで私は、自己を物語る中心の軸を「弟の死」に決定している原因が自分自身が「弟の死」をまだ受け入れられていないからではなく、自分自身の過去の体験が何かしら自己を物語る中心の軸を決定する要因になっているのではないだろうか。と仮説を立てることにした。そこで本稿では、筆者が「弟の死」を受け入れられている段階であることを筆者自身へインタビュー調査を行うことでまずは証明し、インタビューのデータをさらに分析することで真因について考察していきたいと思う。

## 2 方法

### 2.1 調査概要

#### (1) 調査対象者

筆者自身を調査対象としてインタビューを行った。調査対象者は 1983 年生まれで、現在は 23 歳の大学 4 年生である。

#### (2) インタビュー形式

本書では、具体的な手続きとして筆者の弟が死んだ日から現在に至るまでのライフヒストリーを時系列に沿って紹介する。時系列に沿って記述しているのは年代ごとに自己

がどういう段階を経て形成されていっているのか、何が自己に影響を与えているのかを分析しやすくするためである。またインタビューの具体的な方法としては、身近な人にインタビューを依頼し、筆者の記憶が特に印象に残っている場面を時系列に思いつくままに話すことを行っている。したがってここでは、枚数に合せた取捨、読みやすさのための順序の変更、背景の補足説明、最小限の解釈のほかは、なるべく手を加えていない。語りには「 」をつけ、語りの中で補足の必要があった場合には、( )を使用している。説明等は「 」をつけない部分で行っている。

### 3 ライフヒストリー

#### 3.1 弟の死後——1年から2年——

##### (1) 弟が死んだ朝の出来事

「毎朝、うちの母親は私と弟を起こしにくるのが日課だったんです。私の家は2階建てで、私と弟の部屋はその2階にあって、向かい合った隣同士の部屋だったんですね。最初に私の部屋にお母さんは来て私を起こした後、(母親は)弟の部屋に向かったんです。私が寝ぼけながら起きようとしていた時、今まで聞いたことのないお母さんの『お父さん来て』と叫ぶ悲鳴が急に弟の部屋から聞こえてきて、母親は父親を呼びに部屋を飛び出していったんです。その悲鳴は今まで聞いたことのないような人の声でした。だから私は寝起きながらも大変なことが起きたんだとすぐに感じ取ることができたんです。でも何が起きたのかは全くわからない。だから勇気を出して恐る恐る弟の部屋に入っていったんです。そうするとそこにはベッドから落ちていて、一見寝たままのような弟がいたんですね。でもよく見たら唇が紫色に変わっていて、何度呼びかけてもびくともしなかったんです」。

「その後にお母さんが救急車を呼んで、父親と母親は弟を救急車に乗せて一緒に病院に行ってしまいました。残された私は何が何だかわからなくて、一人で家庭の医学の本を取り出して何が起きたのか必死に調べていました。何が何だかわからなくて頭が真っ白だったことは覚えています。涙が自然と出てきて、自分の感情もよくわからなかったですね」。

##### (2) 病院からの電話

「それから何時間か経って、病院に行った父親から電話がかかってきました。その電話を受けたのは私だったのですが、父親は震えた声で私に『もうだめかもしれない』とだけ私に

告げました。その時、私は急に泣き出したことを覚えています。頭では何がなんだかわからないし、理解できていない状況だったと思うんですが、涙だけは自然と流れてきて止まらなかったのは覚えています」。

「それから弟の死亡が確定したと（病院から）連絡が入りました。けれども死亡原因がわからないということでした。そこで死体を解剖することになり、そのために父親は弟の着替えを持っていくためにいったん家に帰ってきました。それから弟の着替えを準備し、父と一緒に病院の霊安室に来るように言われたので私も行きました。この時は何が何だかわからない状況でした。自分がしている行動を客観的に見ている人がいるような感覚でした。病院に着いて、病院の裏から霊安室に向かいました。初めて行った霊安室はすごく異質な空間でした。何とも言えない重さがあって、不気味な感じがしていました。霊安室の中に入ると、私の母親は疲れきった顔をしていました。祖母は泣いていましたね。私は昨日まで生きていた人間が霊安室に横たわっているということが、頭ではわかっていてもどうしても理解できないといった感じでした。悲しいとかそういった感情ではなく、客観的に自分が置かれている状況を見ているもう一人の自分がいるような感じでした。だから涙も出ませんでした。今、話をしていて思い浮かぶ映像は自分の姿が映っているんです。自分の目で見ている映像ではなくて、自分を外からみている映像が私には見えています。あとは霊安室に集まった家族の重い表情がすごく印象に残っています」。

### (3) 通夜

「それからは流れるように時間が過ぎていきました。父親と母親はあまり泣いていなかったと思います。お通夜や葬儀の準備に追われ、またそれによって現実を見ないようにしていたようにも私には見えました。私は何をしたいかわからず、何もせずにただじっとしていました。ただ私は一人でいることが怖くて、祖母のそばにずっといました」。

「弟の遺体が病院から戻ってきてからはずっと（弟の）隣にいました。目の前に弟の遺体があることはわかってはいても、どうしても現実が理解できませんでした。放心状態に近かったと思います。死亡診断書を見てもピンとこない。お通夜にはいろんな人が来て、悲しんで泣いてくれました。だから私はその泣いた人を励ましていました、『大丈夫です』って。なんだか逆な気がしますが、あと辛かったことはお通夜に来る人たちが私に『あなたがしっかしらないとダメよ』とか、『お父さんとお母さんを支えてあげてね』という言葉をかけることでした。だから私は自分が頑張らなければいけないと思いましたし、自分は両親を支

える存在なんだと自分を追い込んでいきました。だから私はこのときは泣けなかったんだと思います。この時は泣いた記憶がありません。弟のことを考えるより、周りの家族を見て自分が何とか支えなければならぬと思って必死だった気がします。だからお通夜に来てくださった人が帰った後は何だか少しほっとしました」。

#### (4) 火葬

「私が一番辛いと感じて思い切り泣いたと思うのは火葬の日です。(火葬の) 前日の夜はずっと眠れなくて、弟の遺体の前にずっといました。私はどこかで生き返るんじゃないかって思っていたんですよ。もちろん不可能なことだってことぐらいわかってはいるんですけど、それでもそう思っていた自分がいました。だけど火葬をして体がなくなってしまうたらもう無理なんだと思って、それがすごく怖かったことを今でも覚えています。これでもう諦めなきゃいけないことをどこかで気づいていたんだと思います。弟が死んだ事実は遺体を見ればわかるはずなのですが、受け入れたくない事実を『生き返るかもしれない』と自分に言い聞かせることで見ないようにしていたんだと思います。だけど、体がなくなるということはもう現実を受け入れなければならないと思い、本当に辛かったんだと思います。火葬の当日の朝、お棺にいれられた弟の姿を見ることほどせつないものはありませんでした。『お棺に入れる』という行為がどうしても嫌で、初めて声を上げて『嫌だ』と声をあげて泣いて拒否をしました。初めて自分の感情をむき出しにしたのはこの時ですね」。

「火葬場に着くと、一人一人が最後の挨拶を弟にするんです。私は絶対に弟のことを忘れたくなかったのでこの胸に焼き付けておこうと、弟の顔を心に刻み込むようにじっと見ました。私は『お前のことをずっと忘れずにこれから生きるから』と弟に誓ったのを覚えています。この場面は弟が亡くなって 10 年経った今でも鮮明に覚えている場面の一つで脳裏に焼きついているところですね。あと両親は弟を火葬する際、火葬のボタンを押さなくてはならなかったんです。その光景や、後ろから見ていた両親のボタンを押している後姿は焼きついていて、すごくせつなかったのを覚えています。それから骨になった弟を見たときは『終わったんだな』と思いました。骨は私が持って帰りました。骨だけになると人間って小さくなるんだとつくづく思いましたね」。

#### (5) 葬式

「お葬式で一番印象に残っていることは当時のクラスの担任の先生が来てくださったこ

とでした。みんな私に励ましの言葉をかけるんです、頑張れって。だけど先生だけは違っていたんですよ。何も言わずに抱きしめてくれたんです。私ね、その時に初めて心から泣いたんです。何も考えず、ただ素直になれたと思います。先生には『辛いです』って言えたんです。その時に初めて体と心が楽になるのを感じました。もしあの出来事がなかったら、きっと私はどこかでパンクしていたと思いますね。それぐらいこの出来事は私にとって大きな出来事でした。就職活動をしている時、ある面接官に『今まで生きてきて人から受け入れられたなと感じた出来事はなんですか』と聞かれたことがあるんですけど、私はこの出来事が真っ先に頭に浮かびましたもん」。

#### (6) 日常生活に戻って——筆者以外の家族の場合——

「お葬式も終わって日常生活にだんだんと戻っていったんですけど、うちは自営業で酒屋をしていたこともあってお店を休むわけにはいかず、母親はお葬式が終わってからまたいつものように働きはじめました。でも私はその姿を見るのがすごく辛かったです。なぜかという、接客業の仕事なので本当は笑いたくもないのに笑わないといけないからなんです。母親は『人に会いたくない』とこの頃はよく言っていましたね。まだ自分の中で整理がついていなくて、ゆっくり考えていたい時期に日常生活に戻っていくことは本当に辛かったんだと思います」。

「母親はずっと『自分のせいでK（弟の名前）は死んだんだ』と自分を責め続けていましたね。弟が亡くなる前の夜に母親はハンバーグを作っていたんですけど、弟が死んで以来は辛い日のことを思い出したくないためかハンバーグを作ることができなくなったりもしました。もう今では大丈夫なんですけど、そんなこともありましたね。あとは私が寝ている時に息をしているかを確認にくることがよくありました。弟は朝起きてみたら死んでいたのに寝ていても死んでいるんじゃないかと不安だったんだと思います。あと、父親と母親のケンカもありました。誰のせいでもないのに父親が母親に対して『お前のせいでK（弟の名前）は死んだんだ』と言って母親を泣かせたこともありました。きっと誰もが悲しみを誰かにぶつけたかったんだと思います」。

#### (7) 日常生活に戻って——筆者の場合——

「私自身はそんな家にいるのがきつかったですね。家は暗くなるし、人が死ぬことを初めて経験して何だか怖くなっていました。だからなるべく家にはいたくなかったんです。

だから本当は弟が死んでから体の調子が悪かったんですが学校にはちゃんと行ってました、なるべく弟のことを考えずにすむ環境にいきたくて。でも体の調子が優れなくてあの頃はいつも保健室で休んでいました。家にいるのが嫌で一人で外に出かけていくことも多かったですね。あと、この頃は生きることに虚しさを感じた時期でもありました。『人はこんなに簡単に死ぬんだな』と思うと虚しくなりました。いい加減な人でも生きていけるのになんであんないい子が死んだのだと思うと、人が嫌になって冷めた目で見てしまうことがあったんです」。

「あとは中学の頃は部活にすごく打ち込んでいました。当時は合唱部に所属していて副部長をしていたんですが、後輩が可愛くて仕方がなかったですね。弟と同じ年の子たちだと思うとつい重ねて感傷にひたっていた部分があったと思います。私は弟に何もしてあげられなかったという後悔もあったので、弟と後輩を重ねて後輩を可愛がることで弟に対してできなかったことを償っていたつもりだったかもしれません。あとは何かに打ち込むことで自分は一生懸命生きているという実感がほしかったんです。自分の生きる意味がほしかったんです。弟が死んでから、私は自分が死んだほうがよかったんじゃないか、私が死んだほうが家族はもっと悲しまずにすんだんじゃないかとずっと思っていました。姉弟の一人が亡くなったことで、自分のほうが生き残っていることに対して罪の意識がありました。どうしても比べてしまう自分がいて、それは大学の頃までずっと思っていました。だからこそ、自分の存在意義がどうしてもほしかったんです。弟に対しても頑張っているといないと申し訳ない気持ちで一杯だったので、それが部活に打ち込むことで解消されていたような気がします」。

「あとは自分の両親が私のために生きることで自分達の生きがいを見出していることを知っていたので自分が頑張らなければいけないという気持ちにはなってそれが重いなど感じることはありました」。

「弟に対してはきっとそばにいてくれるんだと信じていましたね。部屋で一人、弟の写真に話しかけることも多かったですし、この頃はまだ弟の誕生日にケーキを買って祝ったりもしていました」。

#### (8) クラスメイトの M の存在

「(私が中学 1 年生の夏に) 弟が亡くなって以来、私に大きな影響を与えてくれたのはクラスメイトの M でした。M は中学 1 年生(13 歳)の時のクラスメイトでした。M と

はもともと仲がよかったのですが、彼女が葬儀の時に担任の先生に託してくれた手紙をきっかけに私と M はもっと親しい関係になりました。葬儀の時、担任の先生は私が特に仲のいいクラスメイトの友達に預かった手紙を渡してくれました。どの手紙も温かいもので嬉しかったのですが、一番嬉しかったのはクラスメイトの M からの手紙でした。M の手紙には『自分も幼い頃、父親を亡くしたことがあってその時に父親を亡くしたことがあるクラスメイトの子から手紙をもらって励まされて嬉しかったから自分も同じように手紙を送る』といったようなことが書いてありました。私は M のお父さんが亡くなっていたことをその手紙を読むまで知らなかったのですが、自分と同じ立場であることが正直嬉しかったです。自分のことをわかってくれる存在のような気がして、M には何でも話せました」。

「M は私が話すことに共感してくれる、唯一の存在でした。当時の私は『なんでうちの家がこんな目に会わなければならないのだろう』と、そんなことばかり考えていました。というのも、母親に『K (弟の名前) 会いたいよ。私は何も贅沢も望んでいないし、ただ普通の温かい家庭がほしかっただけなのにどうしてそれまでも奪われなければいけないの』と毎日のように泣きながら言われていたからです。私は弟が死んだ悲しみよりも、弟が死んだことによって家庭が暗くなったことや、自分の両親が泣いている姿を見るほうがすごく辛かったんです。だから、何でうちの家だけがこんな目に会わなければならないだろうと思っていました。それに家庭が暗くなっていた分、自分がなんとか頑張らなくてはいけないという気持ちでいっぱいだったので精神的にも吐き出し口がなくて苦しかったんです」。

#### (9) クラスメイトの M のお母さんの存在

「M と同じくらいに私を励ましてくれたのは M のお母さんでした。M のお母さんが私に『一緒に頑張っていこうね』と言ってくれたことを今でも覚えています。私はそれが本当に嬉しかったんです。M のお母さんは M のお父さんが亡くなって以来、一人で子供たちを育てていたり、あと M のお母さんの妹さんも早くに亡くなったことがあって私にとっては同じ境遇でした。だから自分と同じ境遇の人が頑張っていたり、そんな人から笑って『一緒に頑張ろう』と言われることはすごく嬉しいことだったんだと思います」。

### (10) 家庭教師の先生の存在

「当時、私は親に弟が亡くなったことで心配されていたこともあって家庭教師をつけられていました。その先生の存在も大きかったです。その先生は当時 19 歳で私と年が近かったことや、その先生自身も母親を早くに亡くしたこともあり共感してもらえることが何よりも嬉しかったんです。私は弟の話の本当はたくさんしたかったんです。けど家では『両親を支える強い私』でいないといけないうちでいたから素直に自分を出せる部分がなかったんだと思います。弱音が吐けなかったんです。だからこそ自分の素直な気持ちをありのままに話せる人の存在はとても大きかったし、求めていたんだと思います。当時、クラスの担任の先生に毎日提出していた連絡帳には毎日、弟のことばかりを書いていた。弟が亡くなって時が経つにつれて世間から忘れられていく虚しさに耐えられなかったんですよね」。

## 3.2 弟の死後——3年から6年——

### (1) 高校1年の時

「私は高校に入学してから家にいる時間が減ってすごく楽になりました。新しい人間関係ができたことも新鮮で、自分を少しリセットできた部分は大きかったと思いますね。ただ、弟が死んだことはあまり友達には話せなかったですね。反応が怖いっていうのもありましたし。だから『何人きょうだい？』と聞かれることが一番困りました。一人と言ってしまうとなんだか弟の存在を消してしまっている気がしましたし、かといって初対面で『弟は亡くなったんだ』とはなかなか言い辛かったです。だから結局は弟に悪いと思いながらも一人だと言っていました。ただ、担任の先生には話をしていましたね。1年から3年の担任の先生全員には率直な気持ちを言っていました。というのも担任の先生とは進路相談をする中で自分がどういう道を歩んでいきたいかを話しているとしても弟が死んだことが出てくるんです。自分の生き方を考える中ではどうしても弟の死を無駄にしたくないという気持ちが強かったです」。

「3年生で将来について考えたときも弟のことが影響していたと思います。うちの母親は子供を亡くして以来、本当に辛そうでした。それなのに世の中には子供を虐待する親もいて矛盾を感じていたんです。だから当時は児童福祉に関心がありましたね」。

### (2) 高校2年・3年の時

「この頃、私には付き合っていた人がいました。この頃、両親はよくケンカをしていました。弟が死んで以来、両親は私を育てることに生きがいを感じていました。その中で、私に対する教育方針には父親も母親も思い入れが強かったため、ぶつかることも多かったんです。そういった中で、私は自分が生き残ったことに強い罪悪感を抱いていました。弟ではなく、自分が死んでいたら家族がこんなにぶつかりあうことはなかったんじゃないかと思っていましたね。だからすごく辛かったですね。そうやって家庭がうまくいっていなかったこともあって、家族には言えないことを彼に話をしていました。彼も幼い頃に父親を亡くしたことがあったので、私の中では弟のことを安心して何でも話せる存在でした。私はこの頃も弟の話誰かにしたいという気持ちがすごく強かったのだと思います。だからそういう点で彼の存在は本当に大きかったですね。家族にはいつも強い私を見せなければいけないなとずっと思っていたので、自分が素直でいれる場所があったのは本当に大きかったです」。

### 3.3 弟の死後——6年から10年——

#### (1) 大学生1年

「私が大学に入学したときに一番心に残っている出来事は、入学式に来た母親が泣いたことです。これは入学式が終わった後に叔母から聞かされた話なので私は直接知らないですし、うちの母親も私を知っていることは知らないと思います。田舎から私の入学式に参加した母親は『こんな立派な大学に片方の子供は入学できるのに片方の子供は大学も行けないなんて同じ私の子供として生まれてきたのに可愛そうだ』と言って泣いたそうです。私はそれがすごくショックでした。確かにその通りですし、弟のことを考えると自分は生きていいのだろうか私はずっと罪悪感を持って生きてきましたから、『やっぱり母親はそういう風に自分と弟を比べてみているんだな』と思ってすごく辛かったですね」。

#### (2) 大学2年生・3年生

「それ以来、私は大学時代を無駄にせずに行きたいという気持ちがすごく高まりましたね。生きていくうえでの、自分の使命感というものを再確認したのはこの時だったと思います。この時、弟の死を忘れることなく、弟のために頑張っていきたいと心に決めました。それに当時は神学部にもいたこともあって、勉強をする上でも『人の死』というもの

がすごく身近に感じられたのでその意識は持続できたと思います。それに私と同じような境遇の友達も比較的多かったですね」。

「大学に入る前の私はあまり外に出て行くタイプではなく、内向的でした。でもそのことがあってからはたくさんの人と会っていこうと思って外に出て行くことが増えました。生きている以上は時間を大切にしないといけないなと思ったんです。生きていることを意識しはじめたら、人と人の時間がどれだけ貴重なものなんだろうと気づいたんですよ。だから大学時代になるべくたくさんの人と出会って、人との出会いを大切にしようと思ったんです。自分でサークルを作ったり、転部もしたりと、アクティブにどんどんなっていました」。

## 4 考察

さて、筆者の弟が亡くなってから現在にいたるまでのライフヒストリーを聞き終えた。本章ではライフヒストリーから得たデータから筆者が「弟の死」を受け入れられている段階であることを悲観のプロセスから証明し、そのデータをさらに分析することで何が根本の原因なのかについて考察していきたいと思う。

### 4.1 悲観のプロセスからの考察

アルフォンス・デーゲンは、死別によって残された人間には「悲観のプロセス」といった一連の情緒反応があり、こうした「悲観のプロセス」の行為は、喪失体験に耐えて、これを受け入れ、現実に対する健全な適応力を回復するために必要な反応だと述べている。またアルフォンス・デーゲンはこのプロセスを段階に分けて分析している(アルフォンス・デーゲン 1996: 34)。

そこでまずはこの「悲観のプロセス」と筆者が歩んできたプロセスとを比較・検討していき、筆者がどのように「死」を受け入れていっており、現在はこういった段階に達しているのかを証明していきたいと思う。

#### (1) 精神的打撃と麻痺状態

アルフォンス・デーゲンによると、心身のショックを和らげようと、一時的に現実感覚が麻痺状態に陥り、頭の中が真空になったようで何もわからなくなる防衛機制が働く

のだという（アルフォンス・デーゲン 1996: 37）。

「私は昨日まで生きていた人間が霊安室に横たわっているということが、頭ではわかっていてもどうしても理解できないといった感じでした。悲しいとかそういった感情ではなく、客観的に自分が置かれている状況を見ているもう一人の自分がいるような感じでした」。

筆者の場合、これは霊安室の場面がこれに値すると考えられる。この記述の部分から霊安室にいる場面ではまだ麻痺状態であることがわかる。

## (2) 否認

これは信じたくないがために、「死」という事実を否定する反応のことをいう（アルフォンス・デーゲン 1996: 38）。このことは火葬の前の段階に現れていると考えることができる。

「私はどこかで生き返るんじゃないかって思っていたんですね。もちろん不可能なことだってことぐらいわかってはいるんですけど、それでもそう思っていた自分がいました。だけど火葬をして体がなくなってしまったらもう無理なんだと思って、それがすごく怖かったことを今でも覚えています。これでもう諦めなきゃいけないことをどこかで気づいていたんだと思います。弟が死んだ事実は遺体を見ればわかるはずなのですが、受け入れたくない事実を『生き返るかもしれない』と自分に言い聞かせることで見ないようにしていたんだと思います」。

## (3) パニック

これは初期に見られる反応であるという（アルフォンス・デーゲン 1996: 38）。これは弟が死んだ朝にこの反応が見られたことがわかる。

「その後にお母さんが救急車を呼んで、父親と母親は弟を救急車に乗せて一緒に病院に行ってしまいました。残された私は何が何だかわからなくて、一人で家庭の医学の本を取り出して何が起きたのか必死に調べていました。何が何だかわからなくて頭が真っ白だっ

たことは覚えています。涙が自然と出てきて、自分の感情もよくわからなかったですね」。

筆者の場合、この反応は早い段階で抜け出せており、このパニックがおさえるために否認が起きていたと考えられる。

#### (4) 怒りと不当感・敵意とルサンチマン（うらみ）

これはショックが収まると、悲しみと同時に、不当な苦しみを負わされたという激しい怒りが湧き起こる反応だという（アルフォンス・デーゲン 1996: 38）。

「当時の私は『なんでうちの家がこんな目に会わなければならないのだろう』と、そんなことばかり考えていました。というのも、母親に『K（弟の名前）会いたいよ。私は何も贅沢も望んでいないし、ただ普通の温かい家庭がほしかっただけなのにどうしてそれまでも奪われなければいけないの』と毎日のように泣きながら言われていたからです。私は弟が死んだ悲しみよりも、弟が死んだことによって家庭が暗くなったことや、自分の両親が泣いている姿を見るほうがすごく辛かったんです。だから、何でうちの家だけがこんな目に会わなければならないだろうと思っていました」。

これは葬式が終わり、日常生活に戻った筆者の様子なのだが、「自分がどうしてこのような目にあわなければならないだろう」といった誰かに責任を押しつけ、自分の置かれた状況を恨んでいることがここからうかがえる。

#### (5) 罪意識

悲観の行為を代表する反応であり、過去の行いを悔やみ自分を責めるのだという（アルフォンス・デーゲン 1996: 42）。

「あとは中学の頃は部活にすごく打ち込んでいました。当時は合唱部に所属していて副部長をしていたんですが、後輩が可愛くて仕方がなかったですね。弟と同じ年の子どもだと思つとつい重ねて感傷にひたっていた部分があったと思います。私は弟に何もしてあげられなかったという後悔もあったので、弟と後輩を重ねて後輩を可愛がることで弟に対してできなかったことを償っていたつもりだったかもしれません」。

「弟が死んでから、私は自分が死んだほうがよかったんじゃないか、私が死んだほうが

家族はもっと悲しまずにすんだんじゃないかとずっと思っていました。姉弟の一人が亡くなったことで、自分のほうが生き残っていることに対して罪の意識がありました。どうしても比べてしまう自分がいて、それは大学の頃までずっと思っていました」。

#### (6) 空想形式、幻想

空想のなかで、亡くなった人がまだ活着しているかのように思い込み、実生活でもそのように振舞う反応のことである（アルフォンス・デーゲン 1996: 43）。

「弟に対してはきつとそばにいてくれるんだと信じていましたね。部屋で一人、弟の写真に話しかけることも多かったですし、この頃はまだ弟の誕生日にケーキを買って祝ったりもしていましたね」。

筆者の場合、弟が亡くなったのにもかかわらず、どこかに弟の存在を求め、目に見えないだけでそばにはいるのだと思い込んでいる部分がこのプロセスに値する。

#### (7) 孤独感と抑うつ・精神的混乱とアバシー

人によっては人間嫌いに気分が沈んで自室に引きこもることが増えるという（アルフォンス・デーゲン 1996: 44）。筆者の場合、それが中学時代に起きていることがわかる。

「あと、この頃は生きることに虚しさを感じた時期でもありました。『人はこんなに簡単に死ぬんだな』と思うと虚しくなりました。いい加減な人でも活着しているのになんであんないい子が死んだのだと思うと、人が嫌になって冷めた目で見えてしまうことがあったんです」。

#### (8) あきらめ（受容）・新しい希望

本来、日本語の「あきらめる」という言葉には、「明らかにする」という意味があり、この段階に達すると、愛する人はもうこの世にいないというつらい「現実」を「あきらか」にみつめて、相手の死を受け入れようとする努力が始まるのだという。受容というのは、ただ運命に押し流されて、投げやりになるのではなく、事実

を積極的に受け入れていこうとする行為だという。また次の新しい生活への第一歩を踏み出そうという希望の生まれたしるしでもあるという（アルフォンス・デーゲン 1996: 45）。

「それ以来、私は大学時代を無駄にせずに行きたいという気持ちがとても高まりました。生きていくうえで、自分の使命感というものを再確認したのはこの時だったと思います。この時、弟の死を忘れることなく、弟のために頑張っていきたいと心に決めました」。

これは大学1年生の頃の記述である。しかし、この頃を受容は再確認したものであり、このようなあきらめの気持ちは中学時代からしだいにできていたと考えられる。

#### (9) 立ち直りの段階—新しいアイデンティティの誕生

悲観のプロセスを乗り越えるということは、愛する人を失う以前の自分に戻ることではなく、苦しい経験を通じて、新しいアイデンティティを獲得した人は、より成熟した人格へと成長することができるのだという（アルフォンス・デーゲン 1996: 46）。

筆者の場合、「悲観のプロセス」から考察を行うと、「立ち直りの段階」に現在は達していると考えられる。プロセスから見るとようやく「新たなアイデンティティ」を確立する段階にまで行き着いたのだと考えられるのだ。つまり筆者は、「弟の死」を受け入れられている段階であることはこの時点で証明することができる。ここから、自己の中心を決定している原因が「弟の死をまだ受け入れられていないこと」ではないことが言えるのである。

## 4.2 役割意識が及ぼす影響

### (1) 役割意識の形成

ここでログの中から筆者が周りからの影響を受け、それによって自分の役割を自らで定め、そのことが筆者の行動まで変えているという部分に注目してみたいと思う。このログの部分から、自己の中心の軸を決定する上で大きく影響を与えているのは「役

割意識」ではないかと仮説を立ててみることにする。「弟の死」そのものが筆者の自己の軸の選択に影響を与えているのではなく、「弟の死」という出来事から影響を受けて生まれた「役割意識」というものが筆者の自己の中心を決定する要因になっていると言えるのではないかと考える。

「あと辛かったことはお通夜に来る人たちが私に『あなたがしっかりしないとダメよ』とか、『お父さんとお母さんを支えてあげてね』という言葉をかけることでした。だから私は自分が頑張らなければいけないと思いましたし、自分は両親を支える存在なんだと自分を追い込んでいきました。だから私はこのときは泣けなかったんだと思います。この時は泣いた記憶がありません。弟のことを考えるより、周りの家族を見て自分が何とか支えなければならぬと思って必死だった気がします。だからお通夜に来てくださった人が帰った後は何だか少しほっとしました」。

このログは筆者の弟が死んだ直後のことが書かれたログなのだが、周りの人間が筆者にかけた言葉が筆者の行動に影響を与えているということがここからわかる。つまり、筆者は周りからの影響を受け、自らで役割を認識し、自覚することで行動を定めているのである。

「お葬式で一番印象に残っていることは当時のクラスの担任の先生が来てくださったことでした。みんな私に励ましの言葉をかけるんです、頑張れって。けど先生だけは違っていたんですよ。何も言わずに抱きしめてくれたんです。私ね、その時に初めて心から泣いたんです。何も考えず、ただ素直になれたと思います。先生には『辛いです』って言えたんです。その時に初めて体と心が楽になるのを感じました」。

「それに家庭が暗くなっていた分、自分がなんとか頑張らなくてはいけないという気持ちでいっぱいだったので精神的にも吐き出し口がなくて苦しかったんです」。

周りの人間から「家族を支える存在」だと言われたことで自分の「役割」を認識して行動しようとしているのだが、その一方、「役割」を果たそうとする中で自分の悲しみを吐き出せる場所を探していることがこのログからわかる。つまり筆者は、本来の自分の感情とは別に求められている役割を認識し、その役割を必死に果たそうとして

いると考えられるのである。また、筆者は自らにとって受け入れがたい「弟の死」というものを認識し、自分の頭の中で整理をして消化させるための手段として「役割」を設定していることも考えられる。

片桐雅隆は「自己と役割」について次のように述べている（片桐雅隆 2000: 51）。

役割は状況を認知し、組織化するための視座（パースペクティブ）であると考えられている。逆に言えば、人々は、かならずしも明確に言語化しうるとは限らないにしても、役割に基づいて状況を組織だったものとして認知している。教師や学生、医者と患者などの役割は、そのような状況の認知や組織化のためのカテゴリーであり、それらのカテゴリーに基づいて、人々は、自己と他者との関係を認知し、また自己と他者との行為の地図を描くことができる。

つまり弟が亡くなり、「家族を支える存在」として自分の置かれている状況を認知することで、置かれている組織・状況といったものを理解しようとしていたのではないだろうか。つまり、弟の死を受け入れられないという混沌とした状況の中で、自己と他者との関係を理解し、自らの行動を自らで規定することで組織化しているのである。自分に他者との関係の中で「自らの役割」を定め、持たせることで弟が亡くなったという理解し難い状況を理解しようとし、周りの人間との関係の変化にも対応しようとしていたのだと考えられる。このような「役割意識」は周りの状況や他者との関係から生まれ、自らで「役割意識」を持ち、認識することが自らの行動に大きな影響を与えることになる。そしてその影響を受けてから生み出された行動によってさらに「役割意識」が認識され、強くなっていくのではないだろうか。

この場合、筆者自身が「自分がなんとか頑張らなくてはいけない存在」と意識することが「弱音を吐けない」という行為につながっている。

つまり、「役割意識」が自らの行動に影響を与える。そしてその「役割意識」の強さが、自己を物語る中心の軸を決定する要因に大きな影響を与えることになるのではないだろうか。なぜならば、その意識が行動を変えるからであり、行動こそが自己に刺激を与えるからである。

そしてこの「役割意識」を強くさせた原因には、筆者とその周りの人間との関係が大きく関わっているのではないだろうか。筆者の周囲の人に対する記述の部分から言

えることは、周囲の人たちとの関係を「弟の死」という視点で構築しているということである。これは、自らが認識している「役割意識」と自らの精神状態にギャップが生じた場合、そのギャップを埋め、自らで定めた「役割意識」を定着させるために自らを「役割意識」が定着するような関係のもとに置こうとしているからではないだろうか。だからこそ、「弟の死」と関連づけて関係を築いていたのではないだろうか。つまり自己と他者を「弟の死」というものでつなぎ合わせ、意図的に関係を作り出していたがために、「弟の死」の影響から逃れられない環境を自ら作り出し、その結果、「役割意識」を強めていくこととなったのではないだろうか。

## (2) 母親の存在

また、この筆者の「役割認識」が根づいたのは筆者の母親の影響も大きかったと考えられる。筆者の記憶の中には他の家族の記述はあまり見られないのだが、母親の記述は頻繁にみられていることからそのことが推測される。筆者の弟の死後の母親の記憶が多いことから、筆者の母親が筆者に与えている影響は大きいと考えられる。つまり、母親が筆者に何かしらの影響を与え、それが筆者の「役割意識」にも影響を与えていたのではないかと考えられる。

「あとは自分の両親が私のために生きることで自分達の生きがいを見出していることを知っていたので自分が頑張らなければいけないという気持ちにはなっていてそれが重いなと感じることはありました。」。

「お葬式も終わって日常生活にだんだんと戻っていったんですけど、うちは自営業で酒屋をしていたこともあってお店を休むわけにはいかず、母親はお葬式が終わってからまたいつものように働きはじめました。でも私はその姿を見るのがすごく辛かったです。なぜかというと、接客業の仕事なので本当は笑いたくもないのに笑わないといけないからなんです。母親は『人に会いたくない』とこの頃はよく言っていましたね。まだ自分の中で整理がついていなくて、ゆっくり考えていたい時期に日常生活に戻っていくことは本当に辛かったんだと思います」。

「母親はずっと『自分のせいでK（弟の名前）は死んだんだ』と自分を責め続けていましたね。弟が亡くなる前の夜に母親はハンバーグを作っていたんですけど、弟が死んで以来は辛い日のことを思い出したくないためかハンバーグを作ることができなくなったり

もしました。もう今では大丈夫なんですけど、そんなこともありましたね。あとは私が寝ている時に息をしているかを確認にくることがよくありました。弟は朝起きてみたら死んでいたのだから寝ていても死んでいるんじゃないかと不安だったんだと思います。

この部分を見てもわかるように、母親に対する記述が多いことから筆者の記憶の中心に母親の存在が大きく関わっていることが伺える。つまり、筆者の母親の行動が筆者に大きな影響を与えていることを意味するのではないだろうか。では、この母親の影響が筆者の「役割意識」に具体的にどういった影響を与えていたのだろうか。

片桐は、役割取得とは、自己のある行動において、その行動に対する他者の反応を前もって予期しうること、また、その予期に基づいてはじめに企画された自己の行動を調節しうることを意味していると述べている（片桐 2000: 51）のだが、つまりこのことから考えると、筆者の行動に対する母親の反応を前もって予期することで筆者は自らの行動を調節していたのである。つまりここでは、母親の行動や言動から「母親を支えなければならない」ということを予期し、それによって自分の行動を調節して、その行動自体を「自らの役割」、「自らの使命」に定めているのである。

筆者にとって母親とは一番身近で「弟の死」の影響を受け、変化している存在であり、そういった人間が筆者の行動に与える影響は大きく、そのことで自らの行動を調節し、その行動がさらに「役割意識」に影響を与えるといったサイクルが生まれているのではないだろうか。

そしてここで注目すべきところは、そんな役割意識をさらに再確認させる出来事が筆者の大学1年生の頃に起きていることである。この部分は筆者がライフヒストリーを語る上で特に鮮明に記憶されていたという部分である。

「私が大学に入学したときに一番心に残っている出来事は、入学式に来た母親が泣いたことです。これは入学式が終わった後に叔母から聞かされた話なので私は直接知らないですし、うちの母親も私がそのことを知っていることは知らないと思います。田舎から私の入学式に参加した母親は『こんな立派な大学に片方の子供は入学できるのに片方の子供は大学も行けないなんて同じ私の子供として生まれてきたのに可愛そうだ』と言って泣いたそうです。私はそれがすごくショックでした。確かにその通りですし、弟のことを考えると自分は生きていていいのだろうか私はずっと罪悪感を持って生きてきましたから。

『やっぱり母親はそういう風に自分と弟を比べてみているんだな』と思ってすごく辛かったですね」。

「それ以来、私は大学時代を無駄にせずに行きたいという気持ちがすごく高まりましたね。生きていくうえで、自分の使命感というものを再確認したのはこの時だったと思います。この時、弟の死を忘れることなく、弟のために頑張っていきたいと心に決めました」。

筆者は弟が亡くなって以来、罪悪感を抱えて生きてきていた。そのため母親に弟と比べられたという出来事は筆者に大きな影響を与えることになる。また、それ以上に「母親を支えなければならない」という「役割意識」を持っていたのにも関わらず、母親を悲しませてしまったということがさらに筆者に「役割意識」を根づかせる原因になったと考えることができる。

筆者は弟の死後、「役割意識」というものが周りの人間や状況の影響によって形成されてきた。そしてそれを意識して行動することでさらにその「役割意識」を自らで再確認し、そのことでより「役割意識」が強まったのである。また、その「役割意識」を持ち、自らに課すことでそれを意識できる環境を自ら選んでいった結果、偏った関係の中でしか自己を見出すことができなかつたのではないだろうか。また筆者の場合は弟の死後から時間が経過した後でその役割を再確認する出来事があったがために、さらに自分の役割の認識度が高まり、それが自己を「弟の死」という軸で語るようになった本当の原因といえるのではないだろうか。つまり、人間は過去の出来事の影響の強さからだけではなく、「役割意識」の強さによって自己を表す軸を決定するといえると考えられる。

浅野智彦は次のように述べている。

常識的には、「自己」というのは自らの様々な行為と体験が帰属させられるある中心のようなものと考えられているだろう。すなわち人は日々、他者と交渉し、周りの世界に働きかけ、そしてそれらを体験してもいるわけだが、自己というのは、そういった無数の行為と体験の中心にあるものと信じられ、感じられている。では、なぜそれは「中心」なのだろうか。それは、そこを中心と見ることによってはじめ

て行為や体験が一定のまとまりや整合性をもって現れるからだ。

けれどもこのようなまとまりや整合性は自然・必然に生まれてくるのではない。それは、一定の視角から行為や体験を取捨選択し、かつそれらを一定の筋に沿って配列していくことによってはじめて産み出されるものである（浅野智彦 2001: 5）。

筆者の場合、それが「弟の死」であり、その「中心」には「役割意識」が大きく影響しているのである。

また、ジョン・コートルも記憶には自己を定義づける記憶があり、それは「人生に形を与え人生によって形づくられる」記憶であり、自分はいったい誰なのかという問いかけに答えてくれる記憶であると述べている（ジョン・コートル 1997: 148）。

つまり、記憶を辿ること自体がアイデンティティを作り出す作業なのであり、自分という人間の過去を物語ることで「形」を与えることができるのである。

就職活動という「自らを語る」という機会の中で、筆者はアイデンティティを作り出し、自分という人間を筆者は自ら作り上げていたのである。

このように人間は一定の経験から取捨選択を行い、それに基づいて「自己」を配列することによって「自己」というものを構築していく。そしてそれを行うためには一定のまとまりを持たせるための軸が必要となり、その軸の決定要因は筆者の場合は周囲の影響を受けたことから生まれた「役割意識」であったといえる。「役割意識」が芽生え、その「役割意識」を自らが他者との関係性の中で植づいていく過程の中で筆者は自分の役割意識を確認し続け、その確認の強さによっての自己を語る上での軸が「弟の死」へと定まっていったのではないだろうか。

さらにその軸を基にして自らの経験の記憶を取捨選択していった作業が就職活動という自分の今までの過去を物語る作業であり、この「物語る」という作業の過程の中で自分の軸が「弟の死」であることに気づき、その気づきがさらに「軸」を鮮明にしていったのである。そして人生、自己というものに形を与えることでさらに「役割意識」を強める結果となり、自己の中心が「弟の死」だと認識されたのである。

## 5 まとめ

筆者はこれまで「弟のために生きる」、「母親を支える存在」といった「誰かのために生きる」といった役割を自らに課してして自己を位置付けしてきたのだが、その「役

「役割意識」が形成された原因には過去の周囲から受けた影響が要因として挙げられ、また自らでその「役割意識」を定着させ、その「役割意識」を忘れないようにするために意図的に他者との関係も選び出してきている。つまり、自らでそういった「役割意識」の枠の中に自分を押し込めようとしてきたのである。これまで自らが語ってきた「自己」というものは自らの過去の影響から生まれた役割意識が基となり、自らで定めていた自己といえるのである。このことは就職活動のように「自分の過去・自分という人間を相手に語る」といった行為を行うことによって生み出されてきた。

そして現在、筆者は新たな段階に至っているのである。それは、もともと筆者は「弟のため、母親のために生きる」といった「役割意識」を持っていたのにも関わらず、その「役割意識」が変わってきているということなのである。弟や母親といった「誰かのために生きる」という役割意識から、「自分のため、生きている人、社会のために生きる」といった役割意識へと考えがシフトしていつているのである。

これは自らで「弟や母親と自分という関係」から「社会と自分」という関係の中に自己を置こうとし、自らで変化させようとしているからではないだろうか。「誰かのために生きる」という役割を自らに課していたのは、「弟や母親を支える存在」という視点からしか自己を確立できず、偏った関係の中にしか自己の存在意義を見出せなかったからである。つまり、自己を形作るものが「弟の死」しかなかったのではないだろうか。これは自らで「弟や母親のために生きる」といった役割意識にとらわれる環境に自らを置き続けていたためであり、著者が「自分のため、生きているひとのために生きる」といった段階に入れたのは、「弟や母親」との関係とは別に「社会と自分」という関係性がしっかりとでき始め、その中での新たな自らの「役割意識」ができ始めているからではないだろうか。「役割意識」というのは自分という人間をどの関係において捉えるかによって変わるものである。そしてどの関係の中に自己を置き、どの関係の中で自分の「役割意識」を持つかによって変化していく。なぜならばその役割を認識することで行動に影響を与え、変化を起こし、その行動によって新たな社会圏が広がり、その中での新たな「役割意識」を自らで作り出していくからである。

## 6 さいごに

立木先生、越智さん、こんなテーマで卒論を書かせていただくことを許していただき、本

を与え、その行動によって新たな社会圏が広がり、その中での新たな「役割意識」を自らで作り出し、それを認識するという過程の中で人は変化していくのではないだろうか。

## さいごに

立木先生、越智さん、こんなテーマで卒論を書かせていただくことを許していただき、本当にありがとうございました。卒論のためというよりは自分という人間を一度整理したくてこのテーマを選び、書きました。私は去年1年間、自分の軸というものが正直わからなくなり、混乱していました。それをなんとかしたくて、おそらくは自己論を自分で書き、認識することで「自分」というものを確立したかったのだと思います。そういった中で先生にはいろいろと気を使っていただき、本当にありがたかったです。

このような機会を頂けたことに深くお礼を申し上げます、ありがとうございました。